

第2回外国語ワーキンググループについて

2015年11月30日に中央教育審議会教育課程部会の外国語ワーキンググループが開催された。

15:00から17:00まで文部科学省15階特別会議室で行われた。
一般傍聴者は30名程度とやや少なめであった。

今回の議題は以下の通りである。

1. 岐阜県の英語教育実施事例の報告
2. 小中高一貫した目標設定のあり方
3. 小学校外国語教育のあり方

次回の学習指導要領の改訂で、小学校の3・4年生から英語教育を開始することが検討されている。

特に、年間70時間が必要とされるのに対し、現状の時間割ではその時間を捻出することが難しいことが課題となっている。

そのため、通常授業は年間35時間とし、不足する部分を朝や昼休み後などの10~15分程度の短時間学習を繰り返すことで補うことが提案されている。

まずは、文科省からの資料の説明があった。

資料の内容として、ワーキンググループで議論すべき論点の確認や、新課程導入時の目標設定の文科省案（たたき台）、試験的に英語教育を実施している学校の実態調査の結果などが示された。

次に、岐阜県の実施事例の報告があった。

小中高を地域ごとに組み合わせて実施校を指定し、目標の設定や活動などを相互に連携することで生徒・児童の学習意欲などが上昇しているといった成果が、実例の映像などを交えて報告された。

単なるチャンツ等の暗記ではなく、コミュニケーションを重視し、自分の気持ちを伝えさせることにより一定の効果が得られているのではないかという分析であった。

その後、発表に対する質疑応答が行われた。

実施校数、短時間学習のやり方などの具体的な内容が補足説明された。

ここまでで既に1時間以上が経過し、議論に費やせる時間は少ないようだ。

まずは目標設定のあり方について議論が開始された。

目標の設定方法として「CAN-DO形式」という名称が使われており、何ができるようになれ

ばよいかをリスト化してわかりやすくするというものであるようだ。

「読む」「書く」「聞く」「話す」の4技能について、この中身を細かくきちんと肉付けし設定すること、地域などで連携することが大事であるとの意見が出された。

また、英語力のレベル評価指標としてCEFRという国際基準が使われており、高卒時にどのくらいのレベルであることを国は想定しているのかとの質問も投げかけられた。

文科省からは少なくともA2レベル、生徒によってはB1レベル以上が想定されており、世界的にはB1～B2レベルが目標とされているとの回答があった。

しかし、高校になると生徒も多様であるため、一律な目標設定が難しいのが課題であるとのことだ。

次に、小学校の英語教育についての議論となった。

ここではやはり短時間学習の是非が主題となった。

学習のためにはやはり45分の通常授業を基本とし、短時間学習は補助的にとどめるべきだとする意見や、そもそも本当に年間70時間も必要なのか、きちんと議論すべきだとの意見もあった。

短時間学習というこれまでと違ったやり方をするためには、教材開発や指導方法など教員の研修といった準備が大変で、単なる機械的な繰り返し練習では効果が上がらないとの意見もあり、短時間学習の導入に否定的な意見が多くみられた。

今回は小学校における英語教育が主な議論の主題であったが、中・高についても今後議論していくとのことである。